

# 「マスコミの報じる中国と実際の中国 —習近平と彼の目指すもの—」

杉本 勝則 氏

北京外大北京日本学研究中心 客座教授

## 1 孤立しているのは中国ではなく日本

私は長らく参議院事務局に勤めており、そのうちの約半分は委員会運営の仕事に携わり、半分は調査室で産業政策やエネルギー・環境問題、国際問題などに関わりました。学生時代から中国史が好きで、仕事とは別に、宮本雄二・元中国大使が会長をされている日中関係学会の事務局長をしていました。

中国を旅行で訪れたことはありますが、仕事では関係がなく、住んだこともなかったため、その本当の姿を自分の目で確かめたいと思い、定年退職を機に中国の大学の客員教授兼留学生になりました。

2015年9月3日に「中国人民抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利70周年記念式典」が開催されました。日本のほとんどの新聞は、参列したのはプーチン大統領と朴槿恵大統領だけだったと否定的に報じました。しかし、実際には中国の周辺諸国のほとんどだけではなく、英仏が大臣クラスを政府代表として派遣するなど、31カ国が参列し、米国は大使が出席しました。それに対し、日本だけが完全にボイコットし、大使館員も行かなかったとのこと。マスコミは中国が孤立しているといっていますが、実際に見ていると、孤立しているのは日本のほうに思えました。

このことは、70周年記念式典のあとの9月28日にニューヨークで行われた日ロ首脳会談で、北方領土について、ロシアの外務大臣が突如、「第2次世界大戦の歴史的事実を受け入れないと、交渉に応じない」と言い出しており、さっそく日本の孤立を利用したわけです。

冷静になって観察すると、中国はずっと日本軍と日本人を使い分けていることが分かります。例えば、南京の虐殺記念館の展示には、「悪いのは日本軍であって、日本国民にはいい人もいた」と明記されています。今回もこの使い分けをうまく、利用していました。

70周年記念式典のパレードを中央テレビ台（CCTV）で3時間放送していたのを、私はずっと見ていました。パレードの先頭では、80～90歳くらいの抗日戦争の老英雄たちがオープンカーならぬオープンバスに乗って行進しており、それを習近平総書記が涙ぐんで見ていました。このような場面は初めて見ましたが、私はそこに彼の本質を見た思いがしました。

また、このパレードでは、ちょっとお腹の出た軍人が先頭に立って行軍の指揮をしていましたが、実は彼らは少将、つまり將軍なのです。こうしたことは中国ではいままでになかったし、他の国でも見たことがありません。なぜ、このような事をしたのかがポイントです。後にテレビ番組で紹介されていたので、今回意図的に行ったわけですが、將軍が若い將校に特訓を受けたそうで、10キロやせたと笑っていました。

極めつけは習近平は、この晴れの舞台で30万人の軍人の削減を宣言しました。軍の関係者は、今日は記念日だと思って演説を聴いていたら、突然リストラ宣告をされたのでパニック状態に陥ったそうです。これはいったいどういうことでしょうか。

日本のマスコミは今回のパレードは、習政権の安定ぶりや中国軍の近代化を示すためと報じていましたが、こんなことは、あたりまえのことです。それ以上の目的があるのではないかと私は、人民解放軍の改革が真の目的だと思いました。人民解放軍は、中国共産党の軍隊です。共産党のコントロールが効いていれば良いのですが、胡錦濤は中央軍軍事委員会の主席でしたが文民は彼1人だったため、軍人がやりたい放題というところまでいってしまいました。当時は事前に胡錦濤に知らせずに軍事演習をすることさえあったそうです。自衛隊の護衛艦にレーダーを照射するなど、誰が見てもおかしい。近代的な軍隊がやるわけがないような事件も起きました。軍に対するコントロールが全く

できていなかった。何とかしなければならぬと、まともな指導者なら思うはずです。

中国共産党は、抗日戦で勝利して政権を取ったのですから、抗日といえば誰も反対できません。誰も反対できない抗日を利用して、一気に軍改革を進める。実際に2015年の11月になって規則を全面改正して、軍に対するコントロールを強化しました。

## 2 中国共産党内部の権力闘争の歴史

胡錦濤政権末期の頃、日本のマスコミでは、胡錦濤の出身母体の共産主義青年団（共青团）と共産党幹部を親に持つ太子党が対立し、太子党は一枚岩だなどと言っていました。中には、太子党は、子どもの頃から一緒に遊んでいたもので仲がいいなどと解説している記事もありました。しかし、中国共産党の歴史は、内部の権力闘争の歴史です。親同士が命がけの権力闘争をしているのに、その子どもたちが仲がよく一枚岩ということがあり得るのか、常識的に考えればおかしいと思います。

これに関しては、薄熙来事件というものがありました。薄熙来たちがクーデターを起こそうとしていたと言うものです。中国の民主化に尽くした元総書記の胡耀邦はいまでも人気がありますが、薄熙来の父親が胡耀邦の失脚を謀り、それを習近平の父親はかばったために鄧小平に遠ざけられました。薄熙来の息子は、ロンドン留学中に美女と一緒に高級車を乗り回していたような人物ですが、習近平の娘はマスコミが探しても分からなかったくらい、表に出ない控え目な人でした。これほど違う人たちが、果たして本質的に仲良くできるのかどうか。

日本では薄熙来は評判がよく、マスコミでも高く評価されていました。しかし、呉儀女士が國務院副総理を辞める時に、今後薄熙来を昇進させない、その代わりに私は退職後は一切の公職に就かないと明言しました。これを小さな囲み記事で読んで、薄熙来の本質を理解しました。少なくとも、党内もしくは政府内では非常に不信の目で見られていたということです。そういうところを、マスコミの報道から読み取らなければなりません。

私は仕事柄、30年以上にわたって多くの国会議員に接してきました。中には、マスコミで脚光を浴びる方もいらっしゃいましたが、目立たないことにも真面目に取り組んでいるかどうか大事だと思います。例えば、中曽根元総理は風見鶏などといわれて目立つことが好きだと思われるかもしれませんが、私は息子さんの中曽根弘文参議院議員と海外へ一緒した時に色々おとうさんの話を聞きましたが、目立たないところで非常に良いことをなさっていました。日本のシンドラマーといわれる杉原千畝の

話も中曽根さんが世に紹介したのですが、ご本人はそんなことを一切おっしゃいません。そういうところを見て、ご判断いただきたいと思います。

## 3 「ルイスの転換点」と「一帯一路」

中国経済に関して、「ルイスの転換点」議論に触れたいと思います。これは、発展途上国の経済が成長する過程で、労働者が農村部から大都市へどんどん出てくる。その安い労働力を使って経済活動が拡大するものの、労働力の増加が次第に落ち着き、かつ賃金も上昇するなどして経済成長が鈍化するために、経済成長が頭打ちとなり、構造改革をしないと先進国にはなれないというものです。この現象がこれからの中国で起き、さらに「一人っ子政策」で労働者が減る影響もあって、中国経済の先行きは暗いなどと日本では言われていました。

私もそのように思って中国に行きましたが、実際に中国へ行ってみると、いろいろなことが急激に変化しつつある中国で、変わらないことのひとつが、お店に行くと店員がたくさんいるということです。一人でできる仕事を3～4人でやっており、いろいろなところに人がたくさんいます。賃金は上がったかもしれませんが、労働者は余っていると実感しました。

ルイスの転換点の議論に関して、現在の日本の状況を見ると分かるように各種省力化機器が存在し、システムを変えるだけで、4人でやっていたことを1人でできるようになる。そうやって労働生産性を上げれば所得も増え、個人消費も活発化し、経済の発展につながります。このことを清華大学の先生に確かめたところ、その先生が来日して一番驚いたのは、成田空港でカートの整理をしている作業員の髪が真っ白だったことだそうです。日本ではこんな高齢者が仕事をしている、すごい国だと。それに、膨大な人口をかかえる中国はまだまだ余剰労働力をかかえているとも言っていました。中国は男性が60歳定年で女性は55歳ないし50歳ですが、定年の年齢をちょっと上げるだけで、たちまち労働人口が増えるというわけです。

中国内陸部では、所得は低いものの、消費意欲は本当に高い。家の中に家具がないのに、何が欲しいかと聞くと自動車と答えたので驚きました。そういう感じになっています。2年ほど前にウイグル人の友人を訪ねて、ウルムチの街も歩き回ってきました。従来、中国の物流ルートは東方にしかなかったのですが、一帯一路というスローガンの下、西方へも道路を建設してトラックがどんどん走っていました。日本では、中国主導の AIIB（アジアインフラ投資銀行）に加盟すべきかどうか悠長な議論をしていましたが、一帯一路の現場ではインフラは既に完成していたので

す。工業団地は既に出来ていますし、西側の国境まで新幹線は間もなく出来あがります。

私もかつては公務員だったので、例えばテクノポリス構想といったいろいろな政策に関わりました。そうした場合に現地を見に行っても日本では更地で、まだ何もないのがほとんどです。まずは構想を打ち上げて財務省に予算案を作ってもらい、国会で予算を認めてもらってから、実際に建設が始まるわけです。そうしたイメージで一带一路を見に行ったところ、既にできあがっていたのです。

ところが帰国してみると、現場を見ていない有識者が相変わらず AIIB に加入すべきか否かを論じている。しかし、現実には既に中国側のインフラはできあがっており、その先の中央アジアの国々とこれをどう接続するか、そのための資金をどうするかという議論をしている時に、日本ではインフラはこれから作るという前提で議論をしているのです。随分ポイントがズレていました。

ウイグル人の友人に聞いたところ、新疆には、韓国人とイスラエル人がたくさん来ているそうです。イスラエルは世界最高レベルの砂漠の農業技術を持っているので、その人達が来ているとばかり思っていました。イギリスが AIIB 参加に真っ先に名乗りをあげたのを見て、ユダヤ資本がからんでいたのかと驚きました。

#### 4 日本は中国の立ち後れた面ばかりを見ている

中国経済を見る場合の注意点について、お話をいたします。2016年3月末に全国人民代表大会が開かれ、第13次5カ年計画が承認されました。主な内容は、日本の池田内閣が行った所得倍増計画に相当するものです。私はビジネスに関わったことはありませんが、中国でビジネスをやろうと思ったら、中国がこれからやるのがこの5カ年計画に全部書いてあるので、必読だと思います。書かれたことは確実に実行するので確実にビジネスチャンスにつながりますし、中国ビジネスは難しいと嘆く前にこれら計画をきちんと読むべきだと思います。

例えば第11次5カ年計画のときは、環境規制の目標がなかなか達成できないために、中央から大号令が発せられました。環境基準を達成するよりも GDP が伸びた方が出世できると思っている役人が未だにいるので、環境問題にはなかなか熱心に取り組みません。そこで、中央政府は、環境基準を一つでも達成できなかったら他の成績がいくら良くても昇進できないという制度にしたところ、役人の態度が一変しました。

それまで、日本製品は割高で、中国ではあまり売れないので日本企業は諦めムードがありました。ところが、中国では、環境基準の達成が最重要になり、価格はいくらでも

いいから契約すると役人が言い始めたのです。日本の環境省にいた友人は、絶好のチャンスだから中国ビジネスに力を入れるようにと日本企業に働きかけたものの、反応が全然ないと言っていました。いまなら言い値で契約してもらえるのに、それを逃したと。これなども、キチンと5カ年計画の情報をつかんでいれば、大もうけできたのにと思います。

次に、今回の第13次5カ年計画が発表された時、日本の有識者のなかには、中国では改革に対する抵抗が強くてもできないと言っていました。さらに、習近平政権が公務員の汚職対策に力を入れたのはいいが、身におぼえのある人が多いため、役人が働かなくなったので計画の実行は難しいと。

でもこれはミスリードではないかと思います。中国では共産党員数は8,500万人です。15人に1人が共産党員です。この党員に対しては学習会をしていますし、党で決定したことは絶対です。最後は強権を発動してでも必要なことはやります。中国は社会主義国であり、日本とは違う体制の国であることの認識が必要だと思います。

また、習近平は「中国は新常态になった」と言っています。これは「新しい状態に変わったこと」を意味し、産業構造を先進国型に変えていかなければ中国に未来はないということです。特にイノベーションが重要であると。先ほどの「ルイスの転換点」による中進国の罠について述べましたが、これに陥らないためにどうすればいいかについても、李克強総理の政治活動報告書にも書かれています。

ところが、先日、読売新聞を見ていたら、広東省にある典型的な旧来型の産業を取材して、中国は大変な状態であると報じていました。確かに現地は悲惨な状態にあります。だからといって中国全体が大変な状態になっている訳ではありません。産業構造を変える時には、大きな犠牲も生じます。しかし、それが、後向きの犠牲なのか、前向きなものなのか、キチンと見る必要があると思います。

今の問題点として、官僚のサボタージュがあります。しかし、中国は3000年の官僚国家なので、どうすれば官僚が動くかというノウハウは持っています。また、習近平は汚職追放に力を入れていますが、もうトップレベルの摘発はないだろうといわれています。トップが摘発されると下のほうまで関連し、それを恐れて仕事をしなくなるので、働いてもらうためにもうそろそろ終りにしようということの様です。

#### 5 習近平が目指すのは偉大な中華民族の復興

習近平は、ほんの3年ほどで権力を掌握しました。これは、彼の親の世代が共産主義の理想を実現するために死に



ものぐるいで頑張ったのに、いまは格差の拡大や汚職といったように共産主義とは正反対の状況なので、それを何とかしなければという強い思いが共産黨員の中にはあり、これが原動力になって短期間で権力を集中できたのではないかと思います。さらに、胡錦濤時代は今では「失われた時代」と言われているように改革が全く進まなかったために、権力を集中して改革を進めたいという理解が指導部にはあったと思います。

日本の新聞には、習近平は毛沢東を目指していると書かれたりしますが、毛沢東の言ったのは「实事求是」です。これは現代風に考えると現場主義ということ。個人消費の拡大、イノベーション、新しいニーズの開発といった新常態は、現場を見てその問題点を正せと言う事を言っていますので、毛沢東をマイナスのイメージだけで見てはいけないというのが私の意見です。日本の政治をみるのと同じ発想で中国の政治を判断していることが、一番の問題だと思います。

習近平は汚職追放に力を入れており、「虎もハエもたたく」といわれて、それが2年近く続いているため、若者に非常に人気があります。ただし、マスコミを規制しており、大学でも西洋の価値観を教えないように制限しています。ですから、日本人から見ると、これほど反動的な政治家はいないようにみえます。しかし、本当に反動的思想を持っているのか、改革を進めるためには、権力の集中が必要だと信じてやっているのかを見極める必要があると思います。私の好きな中国の歴史を振り返ると、清の雍正帝は中国最盛期をつくった非常に勤勉な皇帝といわれていますが、習近平は彼を目指しているのではないかと思うことがありますし、そうあって欲しいです。

また、習近平は実は親日家です。日本について非常に勉強しており、彼の奥様は四季の歌を日本語で歌い、日本語であいさつをなさるそうです。

中国へ行って感じたのは、習近平が本当に目指しているのは偉大な中華民族の復興だということです。例えば、雍正帝の次の乾隆帝の時代には、当時、世界の富の三分の一が中国にありました。ところが、そのわずか60年後には清朝の政務が行われていた宮殿の円明園が焼き討ちに遭い、略奪されました。

円明園で売っているDVDを見たところ、乾隆帝の時代に中国は世界一にアグラをかいて、世界は産業革命でどんどん変わっているのに新しい技術を取り入れたかったために、大きく後れを取ってしまった。それを忘れてはならないと言っていました。実は、私が留学した時の中国語の先生は30代の若い女性でしたが、最後の授業でこのビデオを延々と見せられました。この屈辱の歴史を忘れてはならな

いと。習近平だけでなく、中国の人達のなかには、そういう意識があることを、強く感じます。

中国の歴史はどれぐらいスゴイかと言うと、これは中国の最初の王朝から現代までの地層ですが、日本の卑弥呼や魏志倭人伝の時代はこのまん中あたり、つまり日本の歴史は中国の歴史の半分以下しかありません。中国に対して尊敬の念を持つとともに、日本的な以心伝心は通用しない世界であることを自覚し、物事ははっきり言う必要があると思います。

## 6 気が付いたら、日本を追い越していた中国

中国を見る場合に注意する点ですが、私が北京で知り合った読売新聞や朝日新聞をはじめとしたジャーナリストの方々は、本当に優秀な人達でした。しかし、彼らが東京の本社へ記事を送っても、そんなはずはないだろうと記事にしてもらえない。もしくは、スクープ記事を書くと、その裏は取ったのかと言われる。しかし、中国では、誰が話したか分かったら、その情報提供者は刑務所送りです。

要するに、日本人が見るべき事実が記事になるのではなく「見たいと思う事実」が記事になるのです。中国は日本よりひどい国だと書いたほうが売れると思込んでいるわけ。しかし、気が付いたら中国はどんどん発展して日本を追い越している。何かおかしいのではないかと、日本人も気が付き始めていると思いますし、安倍政権も最近になって急に中国に力を入れていますが、ずいぶん出遅れたと思います。

中国社会の変化は、本当に速いです。例えば、私が北京の対外経済貿易大学に行った時は、大学校内にある喫茶店は2軒でしたが、1年後には6軒に増えていました。人々の考え方の変化も速い。11月11日を「独身の日」として大々的なネットセールスが行われていますが、その一日のインターネットによる通販の売上げが1兆7000億円に上るなど、信じられない事が起こっています。また、こうした変化に対応できる民度の高さに驚かされます。ゴミあさりのオバサンもスマホを操作しました。

中国の人口は日本の10倍以上なので、あらゆることを10倍にして判断したほうがいいのではないかと思います。バブルの崩壊もロングタームです。2008年の北京オリンピックのときに、北京の友人のところに遊びに行っただけです。彼は、土地の転売で大きな利益を得て北京市中心街の豪華なマンションに住んでいました。その話を聞いていて、私はまもなくバブルが崩壊するのではないかと思います。それから8年以上、未だにバブルはハジケていません。

また、10倍にして考えるということは、善い人も10倍い

れば、悪い人も10倍いるということです。悪い人は目立つのでマスコミで喜んで報道されますが、それがすべてではないということを考える必要があります。また、第13次5カ年計画で国有企業の改革をやると、600万人の失業者が出てたいへんなことになるという日本の評論家が騒いでいました。これは、日本なら全労働者の7%以上に相当する数字ですが、中国では1%にも満たないわずかな数です。日本の基準で中国を考えると、おかしな結論になってしまいます。

中国に関心がおありでしたら、きちんとした情報を得ていただきたいと思います。経済に関しては財務省の田中修氏のレポート、政治については加藤隆則氏がネットに最新の情報を書いていますので、参考にさせていただければと思います。

これは加藤隆則さんがおっしゃっていますが、中国は、「反日」から日本を超えて、中国が世界の主流になりつつある「超日」という意識に変わったのではないのでしょうか。中国のテレビを見ていたら、APECのニュースでは世界各国の首脳が嬉しそうに習近平に握手を求めています。私はあまり良い気はしませんでした。

私が留学していた中国の對外經濟貿易大学の学生1万5000人のうち、留学生は3000人でした。韓国人が750人、インドネシアから400人、タイが200人、ベトナムは100人、日本人はたったの60人です。また、中国の山奥の集落に行っても、サムスンの看板があります。流通業では、カルフルとウォルマート。そうした現実に気が付いてほしいと思います。

しかし、日本のほうが遙かに優れているものがたくさんあります。特に、日本ならではのセンスの良さ、30~40年の先行した技術とノウハウがあります。例えば、中国にも新幹線はあり、定刻通りに運行します。しかし、静かさとかデザインセンスのレベルが全く違うことが、一度乗ってみれば分かります。

そういうところはまだまだ日本に追いついていないということに気が付けば、日本に対する尊敬心も生まれるでしょう。また、日本人のほうでも相手国の歴史や進歩の速さに対する尊敬心を持てば、日中関係だけではなく、他の国々ともうまく付き合っていけるのではないかと思います。